



「万代に伝へむ」の意図を込めて命名されたとも言われる『万葉集』は、日本最古の和歌集であり、仁徳天皇から淳仁天皇まで、天皇から乞食まで、神話時代から醸成されてきた文学の一つの到達点を示しており、現代にまでつながる日本人の感性の源の一つとなっている。

写真は完本としては最古の西本願寺本万葉集の冒頭歌である。

雑歌

泊瀬朝倉宮御宇天皇代

大泊瀬稚武
天皇

天皇御製歌 興毛興呂毛

- 1 籠毛與・美籠母乳 布久思毛與 美夫君志持・
此岳爾・菜探須兒・家吉閑・名告紗根・虚見津・
山跡乃國者・押奈戸手・吾許菅居師・告名倍手・
吾己首座・我許者・背齒告目・家呼毛名雄母
- 2
- 3
- 4
- 5
- 6

高市岡本宮御宇天皇代 息長足日廣額
天皇

『万葉集』の研究は、平安朝中期の梨壺の五人の研究から始まり、鎌倉時代の仙覚江戸時代の契沖と、長く、深い研究の積み重ねがある。近代に入っても、多くの研究が積み重ねられてきた。これらの研究を背景にして、現代の解釈は成り立っている。この歌は、現代の解釈では、5行目の「師」を次句につけ、「告」の字を「吉」の字に訂正し、6行目の「者」を衍字として削るのがふつうである。句点の位置もこの写本とはかなり違った形に改められる。題詞の下に「興毛興呂毛」と書き入れがあるが、平安時代の写本の一つである元暦校本の本文と訓と一致するので、異訓(異文)を書き込んだものである。この異訓に従えば、「籠(こも)」という万葉仮名が一つ増えることになるが、この本文・訓は現在では認められていない。この歌の内容は、
籠(こも) 良い籠を持ち、ふくし(野菜などを掘り取るへら)も 良いふくしをもち、
この岳で 菜をお摘みの娘さんよ 家を聞きたい 教えてほしい、
大和の国は すべて 私がり、あまねく 私がり
私こそ (先に) 告げよう 家も名も

木田章義(日本学分野責任者・京都大学)